opusdei.org

待降節黙想:12月20 日

黙想のテーマ:「あらゆる召命の喜び」「神のみ前で恵みを受ける」「私たちのうちに神のみ業が実現される」

あらゆる召命の喜び

神のみ前で恵みを受ける

私たちのうちに神のみ業が実現される

大天使聖ガブリエルは、果たすべき 重大な使命を持っていました。その 時が来ました。神は、人類の救いの 歴史を成し遂げるため、ナザレに住 む一人の乙女に目を留められまし た。天使は、恵みに満ちた方に挨拶 します。万物が息を呑みます。「マ リアはこの言葉に戸惑い、いったい この挨拶は何のことかと考え込ん だ」(ルカ1・29)。多くの芸術作品で は、天使の挨拶を受けたマリアが、 聖書を読んでいる姿で描かれていま す。この深い思索の姿勢が、マリア と神との絶え間ない対話を可能に し、祈りの生活において、常に「思 い巡らす | という在り方に導いたの ではないでしょうか。

マリアのように、神の招きを感謝の 気持ちで受け入れることがどれほど 難しいかということに、私たちはし ばしば気づかされます。神が私たち から何かを奪おうとしているのでは ないか、あるいは、神のご計画のた

めに、この世の喜びを手放さなけれ ばならないのではないかと、不安を 抱くこともあるでしょう。しかし、 実際は正反対です。神は私たちが幸 福であり、永遠の喜びにあずかるこ とを望んでおられます。神ご自身 が、その無限の喜びを、私たちと分 かち合いたいと願っておられるので す。イエス・キリストが十字架を受 け入れられたのも、この願いを叶え るためでした。ただ私たちの自由 が、神のその願いを妨げてしまうこ とがあるのです。ベネディクト十六 世は、その教皇職の初めに言いまし た。「キリストを恐れないでくださ い。キリストは何も奪うことはあり ません。また、キリストは皆様にす べてのものを与えてくださいます。 自分自身をキリストにささげるな ら、私たちは百倍を受けます。そう です、キリストに向けて、大きく、 大きく、扉を開きなさい。そうすれ ば、皆さんはまことのいのちを見い だすでしょう | ㎜。

教会は今日の福音を通して、聖母マ リアの召命を私たちに示していま す。その物語を、私たち自身の人生 と重ね合わせることができます。す べての召命は、喜びへの招きです。 確かに、「天国の幸せは、この世 で、幸せでいることのできる人のた めである | [2]。神が私たちに何かを 求められるとき、それは実際には、 神から賜物が与えられているという ことなのです。神の光は私たちの道 を照らし、人生に意味を与え、そし て最大の実りを結ぶことを可能にし ます。

「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」(ルカ1・30)。この天使の言葉は、創造主がその最も美しい被造物を、どのように見ておられるかを示しています。マリアは、ある意味で神の夢で

あり、神の慰めであり、神の慰めであり、神の思めであるとは、なったなるとは、かんだされたのであるとは、があるです。くれているといいは、であるでは、なっていかであるとができるとができるとができるとができるとができるとができるとができるというになったができるかもしれません。

しかし、「神の恵みはつかの間の一時的なものではなくならならならないではならならならならならないであることはでいます。神のとさられるに対したちをでいます。神のとされるではにするとになったがではいいないではいいないではないではないではいいないであることを受け入れるようはにないます。召命を受け入れるはまされます。

には、信仰を日々新たにするよう努めなければなりません。召命へのもません。日命ではありません。最初に疑問を抱くだけである。最初にびたび誘惑に出会がよす。キリストの弟子は、自分がよます。キリストのではないかと最後さで感じていますが、神の恵みがもまった。とを自覚します。

人間の恐れの上に天使のお告げが下り、そのことばがもつ福音の力が恐れを消し去ります。わたしたちの人生は、まったく偶然の出来事でも、生き残るための闘いでもありません。わたしたち一人ひとりは、神が愛しておられる一つの物語です。

『神のみ前で恵みをいただく』とは、創造主がわたしたちの存在の中に比類のない美しさを感じ、わたしたちのために壮大な計画を立ててくださるという意味です。もちろん、このことを自覚することにより、すべての問題が解決されるわけでも、

人生の不安が取り除かれるわけでもありませんが、人生を根底から変える力を得ることができます。私たちが迎える未知なる明日は、乗り越えるべき暗い脅威ではなく、各個人に与えられる召命の唯一性を生き、そのことを教会や世界の中の兄弟姉妹と分かち合うための有意義なときなのです」[3]。

たちは、主が語られた言葉をすべて 行います』と言った|(出エジプト 24・3)。マリアと選ばれた民は同じ 動詞を使っています。しかし、イス ラエルの民は、「行う」という自分 たちの行為に重点を置いています が、マリアは「成し遂げられる」と いう神が自分の中で働かれる力に 頼っています。この姿勢の方が簡単 に思えるかもしれませんが、多くの 場合、実際にはその逆であることを 私たちは知っています。私たちは 往々にして、すべてを自分でコント ロールしたいという誤った考えにと らわれがちです。そして、自分の監 視や計画を超えたものに対して、し ばしば不安を感じてしまうのです。

待降節は、喜びと歓喜、そして平和の時です。困難が消えるわけではありませんが、神の働きに「はい」と応えることを学ぶとき、私たちは救いの光を見い出すことができるのです。「マリアは、時にとても困難に

思えるこの『はい』を私たちにも言 うように招いておられます。……そ れは最初は耐え難い重荷、背負いき れない軛のように感じられるかもし れません。しかし、実際には、神の み旨は重荷ではなく、私たちに高く 飛ぶための翼を与えてくれます。こ うして私たちも、マリアとともに、 神のみ旨に『はい』と答えること で、私たちの人生の扉を、そしてこ の世界の扉を開く勇気を持つことが できるのです。神のみ旨こそが真の 善であり、私たちを真の幸福へと導 くものだと確信して、『はい』と答 えるのです | 団。

「はい」と言うことは、神のみ旨が 行われることを願い、その計画の妨 げとならない恵みを求め、聖霊の働 きを阻まないように願うことです。 私たちの心に、たくさんの愛を受け 入れるスペースを開くことは、容易 ではありません。「もっとも大切な ことは、主を見つけることではな く、主が自分を見つけて、優しく気 遣ってくださるがままにまかせることです。幼子イエスを前にします。 たしたちは次のように問います。 『わたしは神が愛してくださるがまにまかせているだろうか』」 ほの幸せが織り込まれ、平凡でのりながらも神聖さに満ちた生活の中で、聖性の道を歩ませてくださって

いることを、イエスと聖母に感謝し

ます。

[1] ベネディクト十六世、説教、 2005年4月24日。

[2] 聖ホセマリア『鍛』1005番。

[3] フランシスコ、第33回「世界青年の日」教皇メッセージ、2018年3月25日。

[4] ベネディクト十六世、説教、 2005年12月18日。

[<u>5</u>] フランシスコ、説教、2014年12 月24日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-20nichi/ (2025/12/13)